

幻想郷の魔法の森。そこに住んでいる普通の魔法使い。霧雨魔理沙。

魔法店を営んでいるが、何を思ったのか改装して喫茶店を開いたらしい。

魔法の森にただの人間は寄り付かない。

しかし、迷い込むこともあるだろう…そんなときに立ち寄れる事を願おう。

霧雨喫茶店 ～ Welcome to Marisa's Cafe ～

※この小説は東方projectの二次創作です。

原作サークル・上海アリス幻楽団さんとは一切関係ありません。

目次

0. プロローグ

事の発端。

1. 異次元の夢

店主が見た夢は不思議だった。

2. お酒の大好きな御伽の鬼

小さな百鬼夜行がやってきた。

3. 星の器のティーセット

店主が選んだ、自慢の器。

4. 金の無い巫女の襲撃

博麗の巫女の襲撃。

5. 魔法の夜

実はまだお昼頃。

6. 金は払うから本は返して

動かない大図書館ご入店。

7. 恋色の閃光

輝くのはカップの光。

8. 血の様な赤い赤いお茶

永遠に赤い幼き月とその従者も入店した。

9. 魔女達の憩い場

魔女は実質一人だけ。

10. 人形少女のお茶会

七色の人形使いがやってきた。

1 1. 東洋の夜間飛行

幻想郷も東洋になります。

1 2. 芥川龍ノ介の喫茶店

水の中のエンジニアがやってきた。

1 3. お酒と鬼と電子のお囃子

みんなで楽しく談笑。

1 4. 星空のティーカップ

閉店後のお話。

あとがき

0. プロローグ

暑さも落ち着き、蟬よりもヒグラシが鳴き始めた晩夏の昼下がりに。

霧雨魔理沙は知人の森近霖之助が営む道具屋・香霖堂に来ていた。

「なんか面白そうなものはないのか？」

魔理沙はめぼしいものが無いか、勝手に棚を漁る。

「君ねえ…勝手に弄るのは止めてくれとあれ程…」

霖之助は呆れながら魔理沙が落とした物を拾っていく。

「お？これは？」

魔理沙は何やら取っ手の付いた小さな箱が付いた物を見つけた。

「それは…たしか、コーヒーマイルだったかな？たまたま僕も使うんだ」

霖之助は拾ったものを棚に戻しながら、魔理沙に説明した。

「コーヒーミルう？」

聞きなれない名前に顔をしかめる魔理沙。生れてこの方聞いたことが無いそんな顔。

「幻想郷にはあまり流通していないが、コーヒーというものを飲むときに使うんだ」

霖之助は魔理沙からコーヒーミルを没収し、カウンターに置いた。

近くの引き出しから何かが入っている袋を取り出した。

「なんだそれ？」

魔理沙は袋の中身に興味を示した。キリマンジャロと書かれている茶色い小袋。

「これはコーヒー豆。このコーヒーミルで豆を挽くんだ」

霖之助がウキウキとコーヒーミルの蓋を開け、コーヒー豆を入れ、ゆっくりと回し始めた。

ゴリゴリと静かに音が鳴り響いた。

「ほーん。んで？」

魔理沙は特に派手な事が起きないのでつまらなく感じてきた。

「まあ、見てなつて」

霖之助は魔理沙をなだめ、お茶を飲むように沸かしていたやかんを近くに置いた。

口の狭い透明な容器を取り出し、何やら紙のようなものをかぶせ、そこに先ほど挽いた豆をスプーンで数杯入れた。

最初は少しだけ、お湯を注ぎ、しばらくしたらゆっくりとお湯を注ぎ始めた。

容器にはゆっくりと茶色い液体が注がれ始めた。

「おおー。なんかすごいな」

魔理沙は興味津々で様子を見る。お茶とは違う事はわかったが、外の世界の飲み物は珍しいモノもあるのだと思った。

「さて、こんなもんな」

霖之助はお湯をある程度注ぎ、注ぐのをやめた。

湯飲みを二個用意し、容器の茶色い液体をそれぞれに入れ始めた。

「砂糖は入れるかい？」

霖之助は少しだけ自分の湯飲みに砂糖を入れた。

「一回このままで飲んでみる」

魔理沙は得体の知れないものだが、何事も挑戦なので少し飲んでみた。

霖之助も同じタイミングで飲み始めた。

「につが！…うへえ…よく飲めるな…」

魔理沙は文字通り苦虫を潰したような顔をした。

「はい。砂糖」

霖之助はほらみろと言わんばかりに砂糖の入った容器を渡した。

「おう。すまん…」

何杯か入れる魔理沙。ニヤニヤと笑う霖之助。やはり子供だなと言いたげな顔。

「な、なんだよ……」

霖之助を睨む魔理沙。なんとなく失礼な事を思っているなど睨んだ。

「別に」

霖之助は微笑みながらに近くの椅子に座った。

「むー……」

恥ずかしい一面を見られた魔理沙は少しふて腐る。

「……」

霖之助は烏天狗からの新聞を読み始めた。

魔理沙はまだふて腐っていた。暫くの間、静寂が流れた。

「あ、そうだ！喫茶店やるか！」

魔理沙は突然声を上げ、満面の笑みで霖之助を見た。

「え？」

驚く霖之助。いつも突拍子もないが、今回は特に驚いた。

他人と仲良くするのが苦手な彼女にできるのか心配になった。

「まずは、魔法店の改装して、必要なものもそろえないとな！」

魔理沙の瞳は爛々と輝き、星のような瞳だった。

「僕の知識でいいなら、ある程度はそろえよう……」

たじろぐ霖之助。そう言わざる得ない顔だった。

(つくづく甘いなあ……)

そう自己嫌悪する霖之助。

「んじゃ！よろしく！！」

魔理沙はそそくさと香霖堂を後にした。

「あ、うん」

見送るしかない霖之助。

この後、大量の品物を（永久的に）レンタルされる事になるとは思っていなかった霖之助。